恋愛・セックス・結婚の哲学者としてのキェルケゴール

江口聡

2023 年 7 月 2 日

目次

1 キェルケゴールの主要著作での恋愛・結婚・性 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2 『あれか／これか』と『人生行路の諸段階』の恋愛論・結婚論・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
2.1 審美家 A の原稿群 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
2.2 偽善的なヴィルヘルム家の危機 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
2.3 『諸段階』の若者の恋愛論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
2.4 ヴィルヘルム夫婦の実態 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
2.5 愛なき／責任なき性行為の罪悪感と結婚生活の欺瞞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
3 『愛のわざ』での恋愛と友情の否定（あるいはその道徳的・宗教的価値の否定） ・・・ 13
4 結論・・・ 16
文献表 ・・・ 17
付録：恋愛・セックス・結婚の哲学とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
付録：コンパクトセックスの哲学史 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

1 キェルケゴールの主要著作での恋愛・結婚・性

- 『わが著作活動の視点の視点』に素直にしたがうならば、キェルケゴールの著作群は、一応のところ 1847 年ごろの実名での大著『さまざまな精神での建徳的講話』『愛のわざ』『キリスト教講話』（あるいは雑誌論文『危機と女優の危機』）まで、あらかじめおおまかに構想された発展であると見ることもできるはずだ[1]。キェルケゴールは自分がなんらの「神の呪い」のために 34 才を越えては生き延びられないことを予想していたとされる。彼は 29 才の著作活動の開始から、呪われ死を予定された 34 才までのあいだに大量の著作を生産したのだ。冗漫で未整理で十分な推敲を経ていないと思われる作品群は、34 才までというごく限定された期間内に、とにかく彼にとって言うべきだと思われたことを言いきるための手段だったのだろうと想像しても許されるだろう。
- 国内ではキェルケゴールは「実存哲学者」として、人間の実存の様態に関する論説（「実存三

[1] 『愛のわざ』等はコルサー事件の影響で追加されたもので、むしろプランは『後書き』までである、という意見もあるかもしれない。

段階」）や、憂鬱、恐れ、不安、絶望といったネガティブな情動論・意識論（いわば心理的現象学)、コミュニケーション論（「間接伝知」)、そして時間論（「瞬間」や「反復」）や存在論・運動論（生成／変化）などの哲学者として読まれることが多い。だが、その偽名著作の半分以上が、直接的には恋愛と結婚をめぐっての彼の考察を表現していることはいまさら指摘する必要はないだろう。

- 長大な『あれか／これか』(1843) と、これまた長大な『人生行路の諸段階』(1845) は、恋愛と結婚（と性）を中心的なテーマにしたものであり、登場人物に重なりがあり姉妹作品だ。『反復』(1843) は不幸な恋愛をした青年と旧約ヨブに関する奇妙でとらえどころのない論考である。『恐れとおののき』(1843) は創世記のアブラハムのイサクの燔祭を中心テーマにしたものだが、特に後半部分では恋愛物語（アグネーテと水の精）についての考察が大量に含まれ、また『あれか／これか』の A と同様の態度の物語論が論じられている。『不安の概念』(1844) は非常に解釈が難しいキリスト教教義論を中心にしたものだが、不安と罪と性欲の問題が論じられている（あれほど性欲と罪を話題にしているのに性欲論として読まれていないことは驚くほどである[2)]）。
- ちなみに、キェルケゴールの名前を正面に出したいわゆる「実名著作」ではエロスや性や結婚の問題が直接に論じられることは少ないが、初期の「建徳的講話」群が、ほぼ同時期に出版された偽名著作と（キェルケゴールの内部では）なんらかの形で内的な関係をもっていることはキェルケゴール自身によって主張されている。『あれか／これか』には講話「信仰の期待」「あらゆるよき賜物、あらゆる完全な賜物は上からやってくる」が、『反復』と『恐れとおののき』には「愛は多くの罪を覆う」が関係づけられている。こうした偽名著作と実名著作の内的な関係を推定するのは、発表者だけでなく多くの研究者にとってかなり困難を伴なうものであるように思われる。だが、一連の偽名著作が終了したのちに発表された実名著作の『愛のわざ』（および『キリスト教講話』）は、ある程度は最初期からの彼の構想の結論あるいは予定された到達点な地位にあると考えてよいのではないだろうか。そして『愛のわざ』こそ、彼の（われわれの一部には）奇っ怪な人間的愛の否定であり、あるいは原理主義的な（そして自然な人間性に反する）キリスト教的愛の要求の分析・展開なのである（キリスト教徒ならば正面からは否定しにくいものかもしれない)。
- 往々にして、キェルケゴールが恋愛・結婚・そして性欲、そしてキリスト教的愛を問題にして著述活動をおこなったのは、彼自身の不幸な恋愛である「レギーネ体験」と結びつけられて解釈される。キェルケゴールにはなんらかの事情があって少女レギーネと公的に結ばれることはできず、レギーネに対するなんらかの善意から彼女を「突き放す」ために（時に皮肉で露悪的な）著作活動をおこなったのだ、と。またキェルケゴールの「秘密」「内面性」は、他人の理解を隔絶したなにか神秘的な哲学的・宗教的現象であるかのように考えられる。しかし、発表者としては、レギーネ体験はレギーネと出会う前からキェルケゴールのなかに芽生えていた独特

[2)] おそらく理解の鍵は、ヒエロニムスとアウグスティヌスとペラギウス派のあいだでおこなわれたアダムとイブが楽園においてもセックスをおこない生殖しただろうか、という論争である。Soble (2008) 第 1 章に論争のが概略があるので確認されたい。

の恋愛・結婚・セックス論と表裏一体、あるいはその帰結であって、「レギーネ体験」は彼のそうした事柄に関する洞察を反映したものとして捉えた方がよさそうだと考えている。

2　『あれか／これか』と『人生行路の諸段階』の恋愛論・結婚論

2.1　審美家 A の原稿群

- 『あれか／これか』が、享楽的審美家 A と良識的市民のヴィルヘルムのあいだの恋愛と結婚をめぐる対話である、ということは誰にでもわかる。ヴィルヘルムが、従来のデンマークキリスト教会的一夫一婦の安定した結婚をくどくどと称揚していることもほぼ自明だろう。問題は審美家・享楽者 A が何をおこない、何を主張しているのかだ。A がおこなっているのは、基本的には恋愛に関する文芸批評・演劇批評を中心にアイロニカルな恋愛についての考察であり、そして不幸な恋愛についての彼自身の創作である[3)]。恋愛の現実ではなく、理念（イデー）が考察されていると言ってよい。しかしどんなイデーか。
- 有名なモーツァルト論（「直接的エロス的諸段階、あるいは音楽的エロス的なもの」）ではエロス的愛、あるいは男性的な性欲の発展段階の問題が扱われている。
- 「影絵」は「誘惑」されて不幸になる娘たちの分析でいかにもロマン主義的である。
- 注目すべきは「輪作」と「初恋」だろう。
- 「輪作」は退屈という問題を扱いながら、恋愛と性的欲望のうつろいやすさ、それによる結婚生活の困難をおもしろおかしく指摘している。

> 決して結婚生活に入ってはならない。夫婦は互いに永遠の愛を誓う。これはまことに安易なことであるが、あまり意味をもたない。……当事者が「永遠に」というかわりに、「復活祭まで」とか、「次の 5 月 1 日まで」とか言ったら、彼らの言葉はともかく意味を持つだろう。なぜなら、それならば実際になにか言ったことになるし、しかもその約束はおそらく守れるものだろう。いったい結婚生活は実際にどうなるか？少したつと、まず両人の一方がうまくいっていないことに気づく。すると他方が不平をこぼして、不実！不実！と叫んだりわめいたりする。しばらくのちには他方も同じ点に到達し、一種の中立性が確立され、両方の不実が相殺されて、共通の満足と楽しみに変わる。ところがすでに時期は遅すぎる。離婚は大きな困難をともなうのである。（白水社 2:107）

- 現代社会では離婚の困難がたいへん意識されており、結婚制度の改革や A が提案している期間限定婚のアイディアも実際に本気で提案されている (Halwani, 2018, 第 11 章)

[3)] あるいは失敗した創作の試みである。たとえば「誘惑者の日記」や「最大不幸者」は、純粋に文学作品として見た場合、一般的な意味では作品の質は高いとは言えないように思う。早い話が読みにくく理解しにくく、そして（キェルケゴールの名前をはずしてしまえば）道具立てはともかくひとまとりのものとしてはさしておもしろくなく、破綻している。解釈や解説において、キェルケゴールの著作の意図やら彼の伝記的情報やらが導入されるのは、ひとつ作品として独立した魅力をもっていないからである。

- 恋愛と人生における退屈、すなわち情熱の減退に対して A が提案する解決策は、際限ない新奇な相手の狩猟ではなく、反復的な「輪作」である。結婚などといった固定的な関係は考えずに、順繰りに交換していけばよいのである。

> ひとが結婚生活をしないからといって、生がエロス性なしであるという必要はない。エロス的なものも無限性をもつべきであるが、ただそれは詩的な無限であって、一時間にでも一ヶ月にでも制限されうるのである。二人が恋着しあって、互いに定められた相手だと感じたならば、断絶の勇気をもつことが肝要である。なぜなら、持続することによっては一切が失なわれるだけで、なにも得られないからである。（2:109）

- この「持続することによっては……なにも得られない」の一文は「エロス性」に限定された話なのか、あるいはもっと広く恋愛・結婚一般や人生についての話であるのか解釈が難しい。おそらくエロス的関係を持続するならば、エロス以外の各種のものが手に入るだろう。しかしとにかく、少なくともエロス的には、つまり情熱的な恋愛や性欲に関係する範囲では持続はそれらを弱めるだけだ、という（よく知られた）事実が詩的されている。
- 恋愛／エロス的関係の相手を次々に乗り換えていくことは道徳的に問題があるかもしれない。キェルケゴールに先だってカントが指摘しているように、単なる性欲によって相手を味わおうとする人々は、いったん味わえば相手を「汁を絞ったレモンのように」捨ててしまう[4)]。これは人を単なる性的満足の道具として使用することで、明らかに不道徳である。だが、恋人たちが（暗黙の同意の上で？あるいは信頼の上で？あるいは「互いに定められた相手である」ということを確信して？）、くっついたり離れたりをくりかえしていれば性欲の減退も退屈も避けられるのだろう。（この「反復」というテーマは、同年に出版された『反復』にも反映されている。愛が本当に永遠のものならば、それが何者かによって予定されているのであるならば、何度も同じ相手と愛しあうことができるはずなのだ。しかしもちろん実際にはそんなことは起こらない。）
- 「初恋」は、スクリーブの原作やヘイベーアの脚本が日本語では手に入らないので論評しにくい。キェルケゴールの評論での筋書の描写がそれなりに正しければ、ロマン主義的な「はじめての恋が唯一の恋になるべきだ」というロマン主義的、あるいはそれ以前の通俗小説的な恋愛観を徹底的に揶揄している。我々は実生活での恋愛はまたく永遠でないどころか、いろんな人物に性的にも精神的にも惚れこみ飽きてしまうものだが、常に最新の恋愛こそが「本当の」あるいは「初めての」恋愛であって、それまでのものは本当の愛でも真実の愛でもない、として片づけてしまうのである。そしてこれは、そもそも我々がいったい何を理由にして恋に落ちる

---

4)「人間愛としての愛は、厚意の愛、好意、幸福の促進、そして他人の幸福を喜ぶことである。しかし、何と言っても、性的傾向性しかもたない人たちが相手をここに挙げた意図のどのひとつに基づいても愛していないことは、すなわち真の人間愛に基づいて愛していないことは、明らかである。そうした人たちは、相手の幸福を考えてみたこともないし、むしろその上、たんに自分の傾向性やたんに自分の欲を満足させるために、相手をきわめてひどい不幸に陥れる。そのような人々が、相手を性的傾向性に基づいて愛する場合には、相手を自分の欲の対象にしているのである。さて、そうした人たちは、相手を手に入れ自分の欲を沈めてしまったなら直ちにその相手を投げ出してしまう。それはちょうど、レモンから汁を搾ってしまえば、ひとがそれを投げ捨てるのと同様である。」（カント『コリンズ道徳哲学』）

のかが実はわかっていない、ということの裏返しでもある。この論点は『諸段階』にも引き継がれるのであとでもう少し詳しくみる。

2.2 偽善的なヴィルヘルム家の危機

- 研究者によってはめったに指摘されていないようだが、『あれか／これか』では良識的市民たるヴィルヘルム判事がいかにも偽善的に描かれているのは現代の読者には明らかだろう（当時の読者にも明らかだったはずだ)。以下のようなことを言う連中にまともなものが混ざっていることすらまれだろう。さもなければつまらない冗談としか解釈できない。

> 私自身に関する限り、私は妻に対して何ら秘密を持っていない。(創言社 2:154)

- 時代としてやむをえないところがあるが、ヴィルヘルムの夫婦間・男女間は非常に保守的であり、女性観はごく差別的であるといってよい。男女はそもそも本性が異なっており、男女間の対等な交際といったものはヴィルヘルムにとっては考えられないようなものである。19 世紀前半に、イギリスのメアリ・ウルストンクラフトやフランスのサンシモン派などによって唱えられた「女性の（男性からの）解放」といった発想はヴィルヘルムの憎むところである。

> 女性は有限性を把握し根本から理解しそれゆえに愛すべきであり、本質的に見てすべての女性がそうでありそれにゆえに優美なのであり、いかなる男もそうではなくそれゆえに彼女はいかなる男もなるすべもなくなるべくもない様に幸福であって、それゆえに彼女はいかなる男もなるすべもなくなるべくもない様に現存在と調和しているのである。……こうして女性は有限性を明らかにするがゆえに男の最も深い生命であり、しかも根のもつ生命がつねにそうであるように秘められ隠されるべき生命である。見たまえ、だから私は女性の解放というようなすべての厭わしい言論を憎むのだ。そんなことが起こるのを神が禁じたまうように。そんな思想がいかばかり苦痛を伴って私の魂に食い入るかは君に言い得ぬほどであり、あえてそのようなことを口にする者に対してどれほど激しい憤りや憎悪を抱くかは言いえぬほどである。(2:427)

- とにかくヴィルヘルムによれば、結婚生活はおたがいへのおだやかな愛情や愛着、と互いの価値の（男女の本性の）評価、なにより互いへの責任と信頼に満ちたものであり、なおかつ、エロス的なものをもそのうちに含み、十分満足のいくものである。そうした結婚生活を成立させることこそ市民として人間としての幸福でありあるべき姿である。カトリックではあるが、20 世紀のヨハネパウロ二世＝カロル・ヴォイティワ (1920–2005) もまったく同意することだろう (Wojtyla, 2013)。
- さて、ヴィルヘルムのご高説はさておき、ヴィルヘルムの自慢の家庭に A によって若干の危機がもたらされていることが示唆されていることは無視されやすい。

私の妻はこうして君に好意をもっている……私の結婚生活にも争いが生じて、君は実際ある意味でそれにも責任がある。無論われわれはそんなことはすぐに乗り越えてしまうが、私の希望するのは、君が結婚している夫婦にとってもっと違う争いの因に決してならないようにということだけである……(2:446)

……では私の挨拶を受けて私の友情を受けとってくれたまえ……私の愛する妻からの挨拶を受けてやってくれ。彼女の考えは私の考えの中に潜んでいるのだから私の挨拶と切りはなすことのできない挨拶として受けてくれたまえ。

……君がこんな手紙を受けとることは秘密にする。またそうすることが私と私の家庭に対する君の関係を変えさせるためになんらかの影響をもつようになどとは少しも望んでいないのだ。……

……こうして私たちの手紙による関係が秘密にとどまるのであるから、私はすべての礼法を守って、あたかも私たちが互いに遠く隔っているかのように君に別れの挨拶を送ろう。私はこれまでの様にしばしばわが家で君に会えることが希望なのだが。(10:453-454)

- 妻に秘密などないはずなのに秘密を作り出しているのは御愛嬌としても、ヴィルヘルムの手紙にある偽善と欺瞞は見逃すべきではない。そしてこの「遠く隔っているかのように送る」別れの挨拶につづいて、「ウルティマートゥム」、戦争前の最終通告が続くわけである。『あれか／これか』はヴィルヘルムが若い A に送るアドバイスではない。むしろ宣戦布告前の通知である[5)]。またヴィルヘルムに関しては『諸段階』という続編に注目すべきである。彼が A に報告している愛らしく従順で満ちたりた妻の様子は、常にヴィルヘルムから見た妻の姿、彼の頭のなかで作りあげた妻の像と二人の関係でしかないのだ。

2.3 『諸段階』の若者の恋愛論

- 『人生行路の諸段階』は出版当時から『あれか／これか』の二番煎じであると判断されていたようだが、実際のところ内容は『あれか／これか』の種あかし的なところがある（もちろん新しいアイディアも大量に含まれている）。
- 『諸段階』は、若きキェルケゴールが娼家に足を踏み入れた経験を描いているだろうとされる「一つの可能性」を含む「責めありや／なしや」以外は研究者に注目されにくいが、「酒中に真あり」やこれまた長大な「読者への手紙」もそれなりに恋愛哲学的に興味深いものを含んでいる。
- たとえば「酒中に真あり」では、恋愛をしたことのないとされている無名の「若者」の恋愛に対する懐疑が述べられている。若者の立場は、『あれか／これか』の A から、詩的・ロマンチックな側面を削った、恋愛に対してアイロニカルな立場だといってよいだろう。A が「輪作」や「初恋」で採用している立場に近い。あるいは、「輪作」や「初恋」での A の詩的な表

[5)] あるいは、「神の前では誰も正しくない」という他人の講話を最後通告にしたということは、ヴィルヘルムが自分がそれまでに書いた手紙の偽善性について気づき、なんらかの咎めを感じているということ、そしてそれを A に伝えようとしているということを表すという解釈も可能かもしれない。

現をごく散文的にしたものだ、とも言える。若者にとって、世の人々が称賛する恋愛というものは、実は矛盾した滑稽なものである。

> エロスは考えられる最大の矛盾であると同時に滑稽なものである（白水社 12:61）

> ぼくは、あらゆる人々が恋愛をし、恋愛をしようと欲するくせに、恋愛の本来の対象であるものが本来何であるのかについての説明をけっして聞くことができないのを、滑稽だと思う。（12:63）

- たとえば一般にロマンチックな恋愛では、愛する相手を失なったときには死を望むほどの苦痛を感じるとされている。しかし、実際に恋愛で死ぬ人間はそんなにいるものではない。

> 詩人たちの言葉に真理があるとするかぎり、失恋はたしかに最も深い苦痛であります。このことがなお証明を必要とするならば、恋愛をする人々の言うことに注意してもらいたい。彼らは、失恋は死である、確実な死であると言い、一度目にはそのことをまる二週間のあいだ信じています。二度目にも彼らは、失恋は死であると言い、三度目にも失恋は死であると〔言います〕。（白水社 13:57）

- どんな対象を愛すべきであるのかということについても実はあやふやである。なぜ人間を愛するのかという問題でさえあやしい。

> おそらく、人は美を愛すべきだという答えが出てくるかもしれません。それにたいしてぼくが、愛するとは美しい土地を愛すること、心をひく絵を愛することなのかどうかと尋ねるとすうるならば、たちまち、エロス的なものは愛という概念の範囲内の一種類なのではなくて、まったく独自のものであることがわかってくるでしょう（12:63）。

- エロス的なもの、つまり性欲は、プラトンが言うような美への欲望といったものであるというよりは、むしろ肉欲なのである。そして肉欲は「愛」という美名で呼ばれるようなものではないはずなのに、一般には「愛」の名と呼ばれているのだ。
- さらには、愛する理由を提出できたとしても、それはその相手の唯一（ユニーク）性を保証しない。なぜ男性は女性を愛する（欲望する）のか？「女性だから」というのはもちろん大きな理由の一つであるはずだ。しかし女性は他にもたくさんいる。

> …… 愛する男が、その恋人のララーゲにむかって、「私はきみが女だからきみを愛するのだ、私は同じようによく別の女を愛することができるだろう、同じようによく醜いツォーエを愛することができるだろう」と言うとしたら、美しいララーゲは侮辱されたと思うでしょう (12:64)。

> もし醜い娘に接吻することがおかしいなら、きれいな娘に接吻するのもおかしいはずです(12:75)。

- 「美しいもの」を愛するのなら美しい山や川でも愛していればよいだろうし、「女性」を愛するのならどんな女性でもよいはずだ。では「美しい娘（若い女性)」を愛するのだろうか？ しかし美しい娘などそこらへんに掃いて捨てるほどいる[6)]。
- もし容姿の美しさではなく、『饗宴』プラトン（ソクラテス）のように、「魂」の美しさを愛するとしても事情はあまり変わらない。美しい魂をもつ青年は、美しい容姿をもつ青年（あるいは娘）よりも数が少ないかもしれないが、美しい魂をもつ青年なり娘なりが存在するならば、それは「唯一のもの」ではないことは確かなことだ。正しいエロスの道は、個々の美しい身体へのエロスからすべての身体の美へのエロスへ、そしてさらに魂の美へのエロスへ、さらには永遠に存在する美そのものへのエロスへと高まっていかねばならないと『饗宴』でのソクラテス／プラトンは主張したわけだが、そうしたエロスの道のなかでは「個人」の唯一性などといったものも、愛の排他性も、愛の恒常性も保証されないし、またさして価値のあることではないのである。したがってロマンチックな恋愛の理想は幻想、主観的な勘違いであり、それに右往左往する連中は滑稽である。
- こうした美的著作での恋愛論にあらわれるキェルケゴールの疑念は、現代のセックスの哲学者たちが熱心に論じている問題群に対応し先取りしている。それは主に愛の（当事者によって主張されている）排他性、唯一性、そして恒常性と、愛する理由に関するものである。
- 一般にロマンチックラブの理想(現実ではない）は次のようなものだと考えられている。(1) 排他的である、つまり相手以外は目にはいらない状態になる、また、相手や自分が、当の相手以外の人間とロマンチックな関係にあることを障害である、あるいは不可能であると考え、そうした人間を排除しようとする。(2) 相手は唯一（ユニーク）であり、他の人間と交換は不可能である。 (3) ロマンチックラブは「永遠」である、つまり恒常的（コンスタント）である、と想定されている。もちろん現実生活でこれらが成立していることは稀だろう。
- ロマンチックラブを、盲目的で、強い情熱とコミットメントと性的欲望（エロス）をともなった関係と解釈する場合には[7)]、(1)(2)(3) のどれもが成立していると感じられるようだが、経験的には、そのような情熱的な関係は実際には恒常的ではない。また、情熱的ではあっても排他的ではない恋愛をする人々や、情熱的ではあっても相手の唯一性を強くは感じない人物もいるだろう（ドンファンやカザノヴァたちとその低級な模造品たちである。ビゼーの「カルメン」の主人公ははまた別のタイプだろう)。
- 運がよい（あるいは人徳がある？[8)]）人々の関係が持続して、二人の恋愛関係がもっとおだや

---

6) そういうものは女子大以外にもたくさんいる。

7) Halwani (2018) は恋愛のこのフェーズを RL1 (Romantic Love 1) と命名して、友愛に近くなったフェーズの RL2 と区別している。日本語では「恋」と「愛」と訳しわけるのがよいという意見もある。ちなみに心理学者／社会学者の Lee (1973) は恋愛を情熱的・性的なエロス、友愛的なストルゲ、遊戯的なルダス、病的・狂乱的なマニア、奉仕的・自己犠牲的なアガペー、実用的・打算的なプラグマに分類していて、現在でも通俗的恋愛心理学書に頻出する。

8)

かで友情に近いフェーズに入るならば（あるいは最初から友人関係の発展としておだやかに性的関係を含むものになったならば)、恋愛の情熱的な初期段階での一部の（少なからぬ）カップルが (2) 唯一性の感覚はまだしも、(1) の排他性を危険にさらすことになる。

- 一つは愛の「理由」に関するものである。「若者」が指摘するように、恋する人々の多くは、なぜ自分がその相手を愛するのかを説明することができない。さらに悪いことに、もし仮に「理由」（金髪や赤い唇など）を示すことができれば、その理由は他の多くの似たような人々にもあてはまることになり、相手の唯一性が危険にさらされることになる。
- また、我々はある対象を愛するときに、その対象がもつなんらかの性質を理由とすることがあるが、そうした人物のもつ性質のほとんどは時間が経過するにつれて変化してしまうものである。たとえば女性の身体的な美貌は年齢によって衰える（ということになっている[9)]）。そうした時間的なものを対象に「愛している」などとうかれるのはまさに滑稽なことだ。
- 他人の恋路は傍から見れば（あるいは無関心 dis-interested な立場で見れば）滑稽な喜劇である。ロマンチックな物語的理想とは程遠いものだが、しかしこれした滑稽なありさまを皮肉に見る態度こそロマン主義の一側面でもあるだろう。

2.4 ヴィルヘルム夫婦の実態

- では、エロス的な、過剰にロマンチックな理想を捨て、なんらかの運命その他を信じて適当な相手と結婚[10)]という制度をもちいて互いにコミットし、信頼しあえる安定した関係を営めば我々は正しい恋愛生活を送ることができるのだろうか。
- ここでもヴィルヘルムに注目してみよう。飲み会で恋愛論をうちあげて馬鹿さわぎして泥酔した男連中が、馬車を飛ばして飲み会あけの朝の散歩としゃれこんだところで目撃したヴィルヘルム夫妻が朝の戸外でお茶をするシーンである。

> 彼女〔ヴィルヘルムの妻〕は「さあ、あなた、お急ぎになって。温かいうちにお茶を飲んでくださいな。……こうしてすこしばかりお世話するのは、私があなたのためにすることのできる最少のことですわね」と言った。「最少のことだって？」と判事は言葉すくなに答えた。「ああ、最大のこと、あるいは唯一のことですわね」。判事は不審そうに彼女を見つめた。そして……彼女は言葉をつづけた、「きのう、私が言いだそうとしたときに、あなたはそれをさえぎってしまわれましたが、でも、私はもう一度よく考えてみましたわ。幾度もよく考えてみま

---

9) キェルケゴールの著作計画の最後のものである「危機と女優の危機」がまさに女優の美貌その他に関するものであることは注目に値する。

10) ちなみに、1851 年まで、デンマークでは結婚という法制度は、デンマーク国教会が独占して承認していた。つまるところ、キェルケゴールにとって、結婚は個人にとって非常に重大な利害関係を含む社会制度・法制度であるとともに、それと同じくらい、あるいはそれ以上にはっきりした宗教的制度、キリスト教的制度であった。国教会の承認・祝福を経ない「市民的結婚／民事婚」が認められたのは 1851 年になってからである。この改革をめぐるって存在したはずのデンマーク国内およびヨーロッパ諸国の議論や、それをキェルケゴールがどう見ていたかは興味深いテーマだが私の能力では調査することができない。

したわ。そのきっかけが誰かはよくご存じでしょう。もしあなたが結婚なさらなかったら、あなたは世間でいまよりもずっとはるかにえらい方になっておいでだったろう、と思いますわ。」……彼は……やがてほほえんだ。しかし、この喜びの微笑には、わずかばかり、哀しげな皮肉(イロニー)の色がといついていたのである。……「それでは、ぼくは君のさっきのばかな言葉を許してあげよう……いったい、ぼくは世間でどんなえらい者になるべきだったというのかね？」判事夫人は夫の言葉にちょっと当惑したように見えたが、すばやく気を落ち着けると、こんどは女性特有の雄弁で自分の意見をくりひろげた。……彼女がさらに話をつづけたとき、彼は右手の指でテーブルのおもてをとんとんとたたきはじめて、何かのメロディーを口ずさんだ。……「夫は、森にわけ入ると、白い枝鞭を折りとった」

このメロドラマ的な演説、つまり、判事の口ずさむメロディーに伴奏された判事夫人の陳述がすむと、やっとのことで返事があった。「ねえ」と彼が言った、「君はまるで知らないようだが、デンマークの法律では夫は自分の妻を打つことを許されているんだよ。ただ残念なのは、どんな場合にそれが許されるのか、法律が指示していないことだ」。判事夫人は夫のおどかしに微笑で答えながら、こう言葉をつづけた、「この問題でお話するときに、どうしていつもあなたにまじめになっていただけないのかしら。……ほんとに、もしあなたが私の夫におなりでなかったら、私もこんなことは考えないでしょうけど、でも、たったいま、あなたと私のために、それを考えたばかりのところですわ。さあ、こんどはどうか、私のために、ちゃんとまじめになって、正直にお答えくださいな」。「いや、ぼくをまじめにさせようとしたって、そうはいかない、まじめに答えてもらおうとしてもだめだよ。ぼくが君を笑い飛ばすか、あるいは、この前のときのように、君にその考えを忘れさせてしまうか、あるいは、君を殴るか、あるいは、君がそんな話をするいことはやめるか、あるいは、ぼくが別の方法で君を黙らせるかするだな。わかるだろう、これは冗談なんだよ、だからこそこんなにたくさんの逃げ道があるんだよ」。彼は立ちあがって、彼女の額に接吻する……

- 上の「客観的」なヴィルヘルム夫妻の描写は、丁重ではあるが、二人のあいだになかなか深刻な問題があることが読みとれる。なにより、ヴィルヘルムは妻の言葉をまともに聴こうとしていないばかりか、口を封じるために暴力による脅しさえ用いている。これが結婚関係においてエロス的・審美的にも妥当な関係を維持している夫妻だとは信じがたい。夫婦ヴィルヘルムは、この描写に続く論考「ある妻帯者の反駁」で、『あれか／これか』の論考と同様に結婚生活の倫理的価値を長大な文章で説くわけだが、その実際の姿がこのようなディスコミュニケーションと暴力と支配の示唆であるのはあまりにも皮肉である。この描写があるために、それに続くこれまた長大なヴィルヘルムの結婚論はほとんど無効にされている。
- 上のヴィルヘルム夫妻の生活があまり快調でなさそうなのはいくつか理由があるからだろうが[11]、妻が「神はキリストのかしら、キリストは男のかしら、男は女のかしら」（1 コリ 11:3）「妻たちよ。あなたがたは、主に従うように自分の夫に従いなさい」(エペソ 11:22) という伝統

[11] 上の引用文中、省略した部分できっかけとしての第三者の存在が暗示されている。

的・宗教的な命令に反していたかもしれないわけだが、かといって夫が妻の言うことをまじめに聞かないでよい、というものでもないだろう。

- 『あれか／これか』の二番煎じ、あるいは解説としての『諸段階』は、A かヴィルヘルムか、という「あれか／これか」ではなく、「あれもだめ／これもだめ」だということをはっきりさせるものだと言えるだろう。もっとも、「あれか／これか」が A とヴィルヘルムの人生観の選択ではない、ということは『後書き』などを読んでいる後世の読者には自明ではあるが、創作の途上、あるいはキェルケゴール本人にとっては、それほどはっきり宣言されたことではなかった。「結婚したまえ、君は後悔するだろう。結婚しないがよい、君は後悔するだろう。結婚してもしなくても君は後悔するだろう」という『あれか／これか』の冒頭「ディアプサルマータ」で宣言されたことがらではある。

2.5　愛なき／責任なき性行為の罪悪感と結婚生活の欺瞞

- 研究者に非常に重要だと考えられているクイダムの日記に含まれる挿話「一つの可能性」にも少しだけコメントしておく。核心的な事件は次だと考えられている。

> 彼は、二、三人の店員と知り合いになった。彼等は世慣れた連中で、じきに彼の世間知らずに気がついた……あるとき森へ遠乗りしたあげくに、非常に盛大な晩餐を取ることになった。そして、ほかの二人にとってはすでに経験ずみの放埒な行為に及ぶ際に、記帳係の当惑ぶりは単に刺激の作用にしかならなかったし、他方、そのための堪えがたい感情が記帳係にとっては刺激になって、その作用は、ぶどう酒が彼らを興奮させればさせるほど、ますます強まるのだった。さて、ほかの二人は彼をいっしょに引っ張っていった。興奮のあまりに彼はまったく別人になっていた――そして悪い仲間にはいっていた。彼らはそのとき、男が女の下品さに金を払うという、まことに奇妙なことをするあの場所の一つを訪れたのである。そこで起こったことは、彼は自分では全然知らなかった。
>
> 　つぎの日、彼は意気消沈して、自分自身に不満を感じていた。いろいろな印象は眠っているあいだにぬぐい去られてしまったが、それでもいくらか記憶が残っていたから、彼は、例の友人たちとの、悪い付き合いは言うまでもなく、適度な付き合いさえももはや求めなくなった。それまでの彼も勤勉だったが、いまの彼はいっそう勤勉になった。そして、友人たちのこれほどまでに誘惑されたと思う苦痛、あるいは、こんな連中を友人にしていたと思う苦痛のために、彼はいっそう遠慮がちになった……

- 古典落語の「明烏」のような体験である。「明烏」で騙され吉原に連れていかれた若旦那はそれなりの満足と新しい知見を得たようだが、この真面目な書記係には結果的に死に至る悲惨な体験だった。気の毒に感じる読者はまっとうである[12)]。気の毒な真面目な書記係は、彼の一夜の過失が妊娠と不幸な子供の出産につながったのではないかと気に病み、恵まれない子供た

[12)] 言うまでもないが、鴎外の『ヰタ・セクスアリス』にもまったく似た話があるが、それは主人公の哲学者には、女性に対応する態度に一定の効用があったようだ。

ちへ慈善事業をおこない続けるが結局精神病で死んでしまう。我々の（カジュアルな）セックスへの嫌悪感にはさまざなま理由があるだろうが、望まない生殖への恐れはそのなかでも特に強いものだろう。

- しかし、この「一つの可能性」のポイントは、むしろ 2 回くりかえされる「いとこ」の言葉、そして年老いた船長たちとの会話にあるようにも思われる。

> あいまいな軽率な言葉でも、年寄りの口から出ると、たしかに、人の心をかき乱すような作用を見せがちなもので、この記帳係のような素質の人間にたいしては、とくにそうである。彼のいとこが絶えず、おきまりの言い方で繰り返す洒落の一つに、だれでも、たとえ結婚した者でも、自分の子供の数を確実に知ることはできない、というのがあった。いとこはそんな人間だったのである。(13:260)

> 〔記帳係の〕いとこは、記帳係が死んだために、私の予期してよりもはるかにまして、本当に感動していたにもかかわらず、また全体の印象も、私の想像してよりもはるかによかったにもかかわらず、「いや、あなた、どんな男だって、たとえ結婚していたところで、自分が子供を何人残すのか、確実には知ることができないんですよ」と、言わずにはおれなかったのである。……こんな言い草がおはこになっていうのは、悲しいことだった。私は刑務所にいる犯罪者を何人か知っていたことがある。彼らは行状を改めた人々で、ほんとうに何か高尚なものの感化を受けていることは、彼らの生活ぶりが証明していたが、しかし、彼らがまじめに宗教的な話をしている最中に、非常にいとわしい思い出の言葉がまじめることがあって、しかも彼ら自身はそれに気がつかなかったのである。 (13:266)

- おそらく、「まじめに宗教的な話をしている」のにもかかわらず、性的な不品行を不品行だと考えていないひとびとが多数いるのだ。書記係のお気に入りのカフェ（あるいは居酒屋）での老船長との会話でも、船長の昔話として彼の数多くの女性遍歴が語られていたようだ。
- 書記係（あるいは「苦悩の記録」の著者）を苦しめたのは、おもに娼家での一泊が、意図せずその真相を知りえない自分の生殖につながったのではないか、という不安とおそれであるわけだが、それだけではなく、世の上品な、あるいは良識ある男たちもまた性的にはキリスト教が要求するような貞潔とはまったく異なった生活を送っている、ということなのだろう。キェルケゴールの主人公たちは、自分の不品行だけでなく、他人の性的不品行と偽善にも苦しんでいたと考える余地があるように思われる。
- つまるところ、『あれか／これか』と『諸段階』の姉妹作品は、一方では通俗的なロマンチックな恋愛の幻想を滑稽に打ち砕きながら、情熱と情欲の生活の不毛さをも指摘し、また一方では善良なる通俗的結婚倫理／性道徳が現実には陥ってしまう偽善性を暴きたてているのだ。それではキェルケゴールの理想のセックスの哲学はどのようなものか。

3　『愛のわざ』での恋愛と友情の否定（あるいはその道徳的・宗教的価値の否定）

- キェルケゴール自身の（個人に関わる倫理と対比される意味での）社会的な倫理、あるいは対人的な倫理に関する見解は、おそらくキェルケゴール自身の想定された「最晩年」の作品である『愛のわざ』に現れているはずだ。
- 『愛のわざ』は「汝隣人を愛すべし」という新約聖書の核心的な命令がいったいどのようなものか、どのように理解するべきか、が論じられ、またその議論から解明された行為が命じられている。そこでは、隣人愛と呼ばれるキリスト教的な愛が、詩人たち（文学者やキリスト教からみて異教的な哲学者たちが称揚し求める「愛」と対比されることになる。
- 『愛のわざ』も大部で大量の論点を含んでいるのでほんの一部しか扱うことができないが、キェルケゴールがロマンチックな恋愛に関して（キリスト教からして）最大の問題点と考えていたことがらは次の点だろう。すなわち、キリスト教の命じる隣人愛は自己愛ではなく、そして詩人や哲学者たちが他者愛として称える恋愛や友愛は実は自己愛の一種でしかない、ということだ。

> とにかくキリスト教というのは、愛の何たるかについて、愛するということについて、どんな詩人にもまして精通しているはずである。だからこそ、恐らく詩人たちの見落すことも、つまり、彼らの称える愛は隠された自己愛に他ならないこと、そして己れを愛する以上に他人を愛せよ、という、この愛の陶酔した表現は、まさしくこの点から説明がつくということも承知しているのである。恋愛はいまだ永遠なものではない。それは無限性のもつ美しい眩暈である。（創元社 10:34）

> 詩人とキリスト教との論争点は極めて厳密にはこのように規定せられる。つまり、恋愛と友情は偏愛であり、偏愛の情熱である、と。（創元社 10:82）(Elskov og Venskab er Forkjerlighed og Forkjerligheds Lidenskab;)

- 詩人や哲学者が称賛する愛は偏愛 (Forkjerlighed / preferential love) でしかない、というのはつまり、恋愛や友情においては単に自分の好み (preference) にあった人々を愛しその同伴や交流をもとめるということである。そして上で見たように、往々にして人々はなぜその相手を愛しているかわからず当人にとっては理由は謎であり、もし仮にはっきりした理由があるとすれば、それは他の同じような相手にも適用できるようなものでしかない。
- ロマンチックな恋愛や、危機的な場面での友情では、生死をかけた自己犠牲的がなされることがあり、それは人々を感動させる。しかしキェルケゴールとキェルケゴールにとって、そんなものは自己愛にすぎない。しばしば愛する相手は「もうひとりの私」であると言われるが、まさにそれが恋愛や友情が自己愛にすぎないことを暴露している。

> 情熱的な偏愛がある別の形式の自己愛であるということが、今や、逆に自己否定の愛は人の愛すべき隣人を愛するものであるということとあいまって証明されなければならない。自己愛というものは、それを自己愛たらしめるゆえんのこの唯一の「自己」に同じように極めて利己的に集中するが、恋愛の情熱的な偏愛は同じく極めて利己的にこのたった一人の恋人に集中し、友情の情熱的な偏愛もこの唯一の友人に集中するのである。恋人や友人は、だから、実に注目すべき、また深い意味のある事柄だが、もう一つの自己・もう一人の私なのである――なぜなら、隣人とはもう一人の君、あるいは最も厳密には平等性の第三者だからであえる。別の自己・別の私なのである。だが、自己愛の本質はどこに存在するのであろうか？ それは私の中に、自己の中にある。だとすれば、別の私・別の自己を愛することの中にも自己愛はやはり潜んではいないだろうか？ (10:84)

- 「私」「自己」が、（人間的な）恋愛や友情によって「もうひとりの私」「もうひとつの自己」に拡張されたところで、自己愛は自己愛にすぎず、それは自己中心的な人々の自己愛と変わるところがない、というのだ。
- 愛が偏愛 (preferential love) である場合には、それは選択的であり、（アリストテレスが指摘しているように）相手がもつなんらかの長所や美点や（自分にとっての）有用性や快楽のために交際しているのだ。しかしそれはけっきょくは自分の利益や快楽や善のためである。相手がなにか恩恵をもたらしてくれる場合には多少の欠点や短所には目をつぶることができるわけだが、しかしそんなことはなにも誇ることができるものではない。利益がその補償にあるからだ。だからこそ、キリスト教的な隣人愛は優れたものではなく、劣った者、不完全なものへこそ向かう。

> ある人を彼の弱さ・欠陥・不完全さにもかかわらず愛しうるということはいまだ完全なものではなく、むしろ彼の弱さ・欠陥・不完全さにもかかわらず、それらゆえに彼を愛すべきものと考えうるということが完全なものなのである。(10:226、強調は江口)

- そして、キリスト教的な理解からは、隣人愛に見られる

> ある奇妙な誤解のために、人は恐らく、隣人への愛は神への関係から切り離されるべきではないが、しかし恋愛は友情はむしろそうあるべきだというようについつい思ってしまうのではなかろうか……多くのものはある奇妙な誤解によって、多分、隣人を――この可愛げのない対象を愛するのには神の助けが必要だが、逆に恋愛や友情に関しては自助こそ最善と考えているのではないだろうか。ああ、神の干渉などはここでは所詮迷惑至極、お邪魔虫でしかないかのように。しかしながら、いかなる愛、いかなる愛の表現も、世間的にも単に人間的にも、神への関係から引き離されてはならないのである。

……愛は一人の人間の他の人間ないし複数の他の人間への関係である。だが、それは決して婚姻の合意、友情の合意、単なる人間的な合意、たとえいかに信頼と情愛に満ちたものであろうと、人間と人間との結びつきでは決してないし、また断じてそうあってはならないのである。各人は、彼が愛において恋人・友人・恋人たち・同時代人に関わる前に、まずもって神に、神の要求に関わらねばならない。神関係が抜かされるやたちまち、愛するということによって理解せんとする事柄についての、お互いに要求せんとするものについての当事者たちの単なる人間的な規定と、それによる彼らの相互判断が、最高の判断になるのである。神の呼び掛けに全身全霊を傾けて聴く者のみが、女性の意に添わんとして手間をとられるといったことがないようにするために、彼女の言いなりになってはならないというだけではなく、愛において女性に属する者もなにはさておきまず完全に神のものたるべきであって、妻のご機嫌とりなど真っ先にやるべきことではなく、まずもって彼の愛が神を喜ばせるように務めるべきなのである。……いかに愛すべきかを各単独者に教えるべきは神なのである。(10:164-165)

- 結婚生活においても、キリスト教的には、お互いに対する愛ではなくまずは神に対する愛がなければならない。

愛は、たとえそれが傾向性の最高の幸福であり喜びであろうと、たとえそれが恋する者たちにとってはこの世の生の最高の善であろうと、やはり真の愛ではない。これはこの世には到底理解できないことなのだが、神はこのようにしてすべての愛の関係における第三者であるのみならず、もともと唯一の愛される対象なのであって、だから妻に愛された者たるのは夫ではなく神であり、夫によって神を愛するよう手を差しのべられるのが妻であり、またその逆でもあって、この関係は不変である。(10:176)

- キリスト教的な愛は、相手から愛しかえされるという報酬すら求めない。むしろたいていの場合には憎まれることを言いしなければならないことすらある。

キリスト教的愛の内面性は、自発的に、己れの愛に対する報酬として恋人（対象）から憎まれていようとするのである。……それはいかなる報酬も持たない。愛されていることという報酬すら持たないのである。(10:190)

キリスト教的に解した場合、約束を守ることが恋人から憎まれることを意味するとすれば、愛を約束することがいかに困難にならなずをえないかが明らかになるであろう。既述のように、まぎれもなく愛の唯一真の対象でもありたまう神のみを愛することが常に幸福であり、常に浄福なのである。(10:189)

- このように、キェルケゴールにおける「愛」は本来的にはキリスト教的な隣人愛であって、恋

愛や友愛は人間生活においては（うまくいけば）最上の幸福ではあるが、キリスト教的には価値をもたない、という形になっている。キェルケゴールの著作群があらかじめおおまかにプランニングされたものであるという想定をおこなうことができるならば、最初期から『愛のわざ』までに至るキェルケゴールの「愛」論はこうしたキリスト教理解にもとづいているはずだ。

4 結論

- キェルケゴールの愛・結婚・セックスに関する最大の特徴は、A が楽しもうとしている享楽的恋愛だけでなく、ヴィルヘルムが称揚する夫婦愛ですら道徳的な優越性はない、というところにある。もちろん道徳的に非難されるものではないだろうし、恋愛はこの世の人生における幸福に重要であり、友情はそれなりには生きられないものではあるが、道徳的・宗教的に祝福されるものではない。宗教的に祝福されるのは、男女の二者間の恋愛や結婚ではなく、あくまで神と信仰を媒介にした三者関係としての結婚なのだ。他の二者間の関係はすべて無価値であり、そんなものにうかれているのは異教的には「幸福」かもしれないが、少なくとも非キリスト教的である。「情欲の目で女を見たものは姦淫したのと同様である」といった言葉を文字通りに受けとめれば、『あれか／これか』や『諸段階』の登場人物たちの一部は罪人でさえある。そしてそういう聖書の文字通りの理解、原理主義的理解がキェルケゴールのセックスの哲学だろう。
- キェルケゴールの講話などの「実名著作」を「キェルケゴール自身の見解」とすることには発表者には若干の躊躇がある。偽名による著作、あるいはキェルケゴール自身が呼ぶところの「美的著作」は発表者のなじみがある英語圏倫理学の用語での「記述的」あるいは「理論的」対「規範的」という分類を使用するならば、もっぱら理論的なものである。すなわちそれはそれ自体では単になんらかの現象や作品や理念を分析し解明するのみ、あるいは（上の『あれか／これか』や『諸段階』がそうであるように）我々が取り組むべき理論的・倫理的課題（たとえば恋愛や結婚の理念が整合的で実行可能なものであるかどうか、またそれにはどのような価値があるのか）を提示するのみであって、直接に人々や読者に行動や規範の受容を指示し命令することは意図されていない。一方、実名での著作は「建徳的」なもの、すなわち直接的に倫理的・宗教的な規範やアドバイスや命令を含んでいるわけだが、キェルケゴール自身はその規範や命令の源泉あるいは権威ではない。建徳的著作群の権威は聖書・福音にあるのであり、建徳的著作群は聖書が命じていることの解明や分析である。つまり、我々は福音や使徒を信じるべきであるという前提を置いた上で、イエスの福音や使徒の言葉を信じるならば我々はしかじかのことを信じ行為するべきだ、ということを解明し、我々にそれを命じるという形になっている。命令の権威はキェルケゴールにではなく聖書にある。異教徒的な視点からすれば、実名著作はキリスト教的愛の理想と、キリスト教的結婚の理想の押し売りである。
- 論じられなかったが重要なポイントが一つ。ある。キェルケゴール自身は愛の対象や理由などのについては大量の考察をおこなっているが、（少なくとも人間どうしが）「愛する」というこ

とがどういうことかということを十分論じてないように見える（あまりにも大部で確認しきれない）。愛が情動であるか、あるいは態度や評価であるのか、といった現代セックス哲学での概念的な問題は哲学的に興味深いものなのだが、とりあえず愛するということは、その対象の善（幸福）を願い求め努力する堅固たる関心 (robust concern) を含むということには多くの哲学者が同意している。これにはおそらくキェルケゴールも同意するだろう。愛は対象の幸福と繁栄の維持と増進を願うものであり、キリスト教的な隣人愛においてもそれは明らかだ。哲学者たちが意見を違えるのは、対象の善（幸福）は、主体・行為者から見た相手にふさわしい幸福であるべきなのか、あるいは主体・行為者の観点ではなく、対象の観点からしての幸福や善であるべきなのか、という点である。キェルケゴールはおそらく、増進されるべきなのは、相手の観点からの幸福や善ではなく、神の視点からの幸福、善である、と答えるだろう（そして主体・行為者が正しいキリスト教理解と信仰をもっていればそれは主体の観点でもあるだろう）。キリスト教の理解では神は人間に自分を愛することを求め、それが浄福であるとされているのだから、キェルケゴール的な愛はまずは、自分が出あう「見る人々」を覚醒させ正しい信仰を促すことである。まったくキリスト教的な愛であると感心せざるをえないが、そんな愛は発表者には興味のもてないことがらである。

- だがキェルケゴールの愛・セックス・結婚の哲学は現代的な問題意識に近く、非常に興味深いものを含んでいるので、今後国内でも研究が進むことを願っている（最初に述べたように、そもそも現在研究者となっているひとびとの多くも、キェルケゴールのそうした面を意識して興味をもったはずだ）。今回は触れることができなかったが、近年は英語圏のキェルケゴール研究者でも『愛のわざ』を中心にキェルケゴールの恋愛哲学が頻繁に論じられており、近いところでは Sharon Krishek の *Lovers in Essence: A Kierkegaardian Defense of Romantic Love* が非キェルケゴール研究者からも注目されている。

参考文献

Coontz, Stephanie (2006) *Marriage, a History: How Love Conquered Marriage*, Penguin Books.

Grahle, André, Natasha McKeever, and Joe Saunders (2022) *Philosophy of Love in the Past, Present, and Future*, Routledge.

Halwani, Raja (2018) *Philosophy of Love, Sex, and Marriage: An Introduction*, Routledge, 2nd edition.

Krishek, Sharon (2022) *Lovers in Essence: A Kierkegaardian Defense of Romantic Love*, Oxford University Press.

Lee, John Alan (1973) *The Colours of Love: An Exploration of the Ways of Loving*, New Press.

Martin, Adrienne M. (2019) *The Routledge Handbook of Love in Philosophy*, Routledge.

Soble, Alan (2008) *The Philosophy of Sex and Love: An Introduction*, paragon house, 2nd edition.

Wojtyla, Karol (2013) *Love and Responsibility*, Boston, MA, Pauline Books.

井上俊 (1966) 「「恋愛結婚」の誕生」,『ソシオロジ』, 第 12 巻, 第 4 号.

関根清三（編） (1999a) 『性と結婚』,「講座」現代キリスト教倫理〈2〉, 日本基督教団出版局.
――― (1999b) 「性と結婚を聖書に問う」, 関根清三（編）『性と結婚』, 日本基督教団出版局.
瀬谷幸夫 (1993) 「訳者解説」,『宮廷風恋愛について』, 南雲堂.
前野みち子 (2006) 『恋愛結婚の成立：近世ヨーロッパにおける女性観の変容』, 名古屋大学出版会.
森本あんり (1999) 「性と結婚の歴史」, 関根清三（編）『性と結婚』, 日本基督教団出版局.
フィリップ・スコフィールド (2013) 『ベンサム：功利主義入門』, 川名雄一郎・小畑俊太郎訳, 慶應義塾大学出版会.

付録：恋愛・セックス・結婚の哲学とは

ここ 20 年ほど、英語圏の哲学者たちは、恋愛、セックス（セクシュアリティ）、結婚といったパーソナルな情動や関係や活動に関心をもち、出版もあいついでいる。この分野を「セックスの哲学」と呼ぶことにしよう。

英語圏の哲学研究者のあいだで恋愛とセックスの問題が注目されるようになったのは比較的最近のこととといってよいだろう。歴史的にはプラトン、アリストテレス、アウグスティヌス、トマス、モンテーニュ、ルソー、ヒューム、ルソー、カント、J. S. ミル、マルクス、ショーペンハウアー、ニーチェ、サルトルと主要な哲学者たちの多くが、恋愛とセックス（性欲）そして結婚についてのそれぞれの見解をかなりの分量を割いて論じている。しかしこうした哲学者たちの恋愛やセックスに関する論議に英語圏が注目するようになったのは最近のことである。そうした背景には、1970 年前後からの「性の解放」、カジュアルなセックスや婚外性関係の一般化、男女のセクシュアリティをめぐる対立に注目する第二波フェミニズムの流行、HIV/AIDS の問題化、「同性愛」の可視化などを通して、セックスが公然と論じられるようになったことがあげられる。一方、カトリックや米国のキリスト教保守による性的問題に関する論説も盛んである。

すこしどんなことが話題になっているかを紹介する。現代の哲学・倫理学では、愛とセックス／性欲と結婚はまったく異なったタイプの現象であり概念であるという共通理解がある。

セックスについては次のような問題が論じられる[13)]。

- 性欲や性的活動（セックス）の定義、その本性
- 性的倒錯の概念
- 不倫（姦淫）を含む婚外セックス、売買春、カジュアルセックス（愛のないセックス）、BDSM、ポルノの道徳性

結婚については次のような問題が論じられる。

- 結婚の定義とその社会的／個人的目的、歴史的意味、宗教的意味
- 正当な結婚の条件、特に異性愛モノガミー（一夫一婦）である理由の正当化、あるいは他の形態の結婚の正当化

そして愛については以下のようだ。

- 愛の分類、タイプ分け（対象によるもの、存在論的地位によるもの、付随する情動によるもの etc.）
- 愛の存在論（それは一体化か、感情か、評価か、態度か）
- 恋愛（ロマンチックラブ）と他のタイプの愛（たとえば親子愛）の特徴の異同

[13)] Halwani (2018); Grahle et al. (2022); Martin (2019) などを見ると論じられているテーマの概略を知ることができる。

- ロマンチックラブの恒常性（持続性）、排他性、親密性、情熱や性的欲望との関係など
- 愛には理由があるか、あるとすればどのようなものが適切か、適切な理由があるとすれば愛は同じ理由のあるものに向かうべきか

こうした概念的・規範的な分析に加え、そうした問題群を考える材料として先にあげたような過去の大哲学者たちの愛・結婚・セックスについての分析が見直されている。キェルケゴールはそうした大哲学者のなかでももっとも豊富な材料を提供してくれている。

コンパクトセックスの哲学史

- 「愛」は古来から哲学の最大の問題の一つだった。プラトンの『饗宴』や『パイドロス』はエロースと知への愛をめぐる論議であり、またキリスト教は「愛の宗教」を自称しており、以降の神学・哲学も「愛」をめぐるものだ。
- 20 世紀の愛をめぐる書籍をひもとけば、たいていは恋愛（エロス）と宗教的・キリスト教的な愛の異同を論じている[14)]。だいたいのところ、宗教的傾向をもつ 20 世紀の哲学者・思想家たちは性的・エロス的・ロマンチックな愛と比較して非性的・非身体的・アガペー的な愛を称揚する傾向がある。恋愛やエロスについての哲学的知見を期待して書籍を紐解き、けっきょくキリスト教的（あるいは仏教的）なお説教を読まされた経験のある人は多いだろう。キェルケゴール研究者の多くも（少なくとも最初は）キェルケゴール自身によってそうした経験をさせられたはずだ（『あれか／これか』も『愛のわざ』もそうした書籍の典型である）。
- しかしこのエロス vs. アガペーという対立図式はかなり幅が狭く限定されたものである。
- エロスとアガペーという対立図式で愛の問題を考えること自体 20 世紀的で、キェルケゴールがその源流の一つかもしれない。
- 本発表は「恋愛・セックス・結婚の哲学」とした。この「三位一体」もどきは、国内では、社会学者らによって「ロマンチックラブ・イデオロギー」[15)]として知られている。
- 一般的な理解では次のようになる。「結婚」は文化的に非常に多様な人間の営みであるが、「結婚」という制度が存在しない文化は存在しない。どの文化にも、男女の性的な関係を保護し規制し管理する公的な結婚制度が存在している。
- しかし、「結婚」が若者の一対一の親密なつきあいとしての恋愛からはじまり、一定期間の交際を経て、結婚の約束や儀礼をおこない社会的承認を受け結婚生活に入り、生殖と子供の養育をおこない、さらにその後も生涯に渡る関係となるべきだ、という発想は西洋近代のものである。
- 現代の非宗教的・分析的傾向をもつ哲学者たちは、愛の概念の明晰化や、愛の分類、その存在

[14)] アンンダース・ニーグレン (1890-1978) の『エロスとアガペー』(1930-1936)、ドニ・ド・ルージュモン (1906-1985) の『愛について』(1939)、C. S. ルイス (1898-1963) の『四つの愛』(1960) など。キリスト教から少し距離があるがエーリッヒ・フロム (1900-1980) の『愛するということ』(1956)）もよく読まれたようだ。

[15)] この言葉自体はおそらく上野千鶴子の造語であり彼女によって広められたものはないかと思われるが、はっきりしない。基本的な発想は井上俊の「恋愛結婚の誕生」論文 (井上, 1966) に現われている。

論的地位や、その道徳性を論じている。西洋語の「愛」はあまりにも多義的な言葉であり、またその対象もあまりにも広い。強い関心をひいているのはやはり恋愛（ロマンチックラブ・エロチックラブ）だが、当然他の種の愛との異同が問題になる。

- 英語圏の「愛の哲学」入門書では、古代の人間的愛の思想としてはプラトン、アリストテレス、それにオウィディウスの 3 人が必ず言及されることになる。
- プラトンの『饗宴』では、エロティックな欲望であるエロースは、美あるいはすぐれたものに向かうもので（したがって優れた性である男性に向かうものの方が上等である）、狂気に類似したものであり、相手との一体化を求めるものとされ、また最終的にはなんらかの産出を目指すものである。
- アリストテレスのピリア（友愛）はプラトンのエロースよりもずっとおだやかで理性的な人間関係に関するもので、友愛的な関係を結ぶ人々は基本的に自分の利益となる相手を選び交際する。友愛は相互的・互恵的なものであり、人々のレベルに応じて、快楽のために交際する人々もいれば、有用性のために交際する人もおり、そして似た美徳をもった人々のおたがいの美徳を願う交際もある。
- 古代ローマの詩人オウィディウスの『恋愛の技法』にあらわれる恋愛はエロチックではあるが、プラトンなどよりももっと快楽の追求が目指されるものであり、遊戯的なものである。
- 古代人にとって「自由な恋愛」は縁遠いものであることに注意しておこう。古代ギリシアにおいてもローマにおいても、中流以上の婚姻は親や周囲のアレンジによるものであり、女性に選択の権利などはない。したがってオウィディウスが考える恋愛は主に既婚者女性の誘惑である。同様に、プラトンが考える恋愛は少年愛（パイデラステア）であり、これもまた結婚においては女性に選択権はなく、また中上流の女性は外出することもないが、男性どうしではある程度相手を選択の上での交際が可能だったから、『饗宴』や『パイドロス』に見られる「少年の口説き落とし」の手法や少年の側の選択の手法が問題になる。
- 旧約聖書は、さまざまな性的な禁止事項や、性的事件、そしていくつかの恋愛物語やエロチックな詩（雅歌）を含んではいるものの、プラトン、アリストテレス、オウィディウスらに見られる人間どうしの情熱的あるいは好意的関係に関する論説はさほど見られない。

> 人にはふさわしい助け手が見つからなかった。そこで主なる神は人を深く眠らせ、眠った時に、そのあばら骨の一つを取って、その所を肉でふさがれた。主なる神は人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた。そのとき、人は言った。「これこそ、ついにわたしの骨の骨、わたしの肉の肉。男から取ったものだから、これを女と名づけよう」。それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである。（創世記）

- 新約聖書では「愛」がテーマになっているが、神の愛、そしてそれを手本とした隣人愛は基本

的には性的なものとは考えられていない[16)]。

> 「あなたがたも聞いているとおり、「姦淫するな」と命じられている。しかし、わたしは言っておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。もし右の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げこまれない方がましである。」(マタイ 5:27)

> ファリサイ派の人々が近寄り、イエスを試そうとして、「何か理由があれば、夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と言った。イエスはお答えになった。「あなたたちは読んだことがないのか。創造主は初めから人を男と女とにお造りになった。」そして、こうも言われた。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから、二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」すると、彼らはイエスに言った。「では、なぜモーセは、離縁状を渡して離縁するように命じたのですか。」イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、モーセは妻を離縁することを許したのであって、初めからそうだったわけではない。言っておくが、不法な結婚でもないのに妻を離縁して、他の女を妻にする者は、姦通の罪を犯すことになる。」弟子たちは、「夫婦の間柄がそんなものなら、妻を迎えない方がましです」と言った。イエスは言われた。「だれもがこの言葉を受け入れるのではなく、恵まれた者だけである。結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい。」（マタイによる福音書 19:3–12)

- パウロの書簡（1 コリント）では独身が推奨され、情欲が問題にされる。

> 男は女に触れない方がよい。しかし、みだらな行いを避けるために、男はめいめい自分の妻を持ち、また、女はめいめい自分の夫を持ちなさい。夫は妻に、その務めを果たし、同様に妻も夫にその務めを果たしなさい。妻は自分の体を意のままにする権利を持たず、夫がそれを持っています。同じように、夫も自分の体を意のままにする権利を持たず、妻がそれを持っているのです。互いに相手を拒んではいけません。

> 娼婦と交わる者はその女と一つの体となる、ということを知らないのですか。「二人は一体となる」と言われています。しかし、主に結び付く者は主と一つの霊となるのです。みだらな行いを避けなさい。

[16)] ちなみにベンサムはイエスの行動に同性愛的なものを見ている（スコフィールド 2013、マルコ 14:51 − 52、ヨハネ 13:24)。ベンサムはキリスト教の性的な禁欲主義傾向をパウロに帰している。

> 日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いと妬みを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。（ローマの信徒への手紙、13:13-14）

- ユダヤ教の伝統での結婚は一夫多妻的であるが、次第にローマの市民法制度における一夫一婦を擁護する個人道徳の規範ともなる (森本, 1999)。
- 我々が現在理想と考えている「ロマンチックな」恋愛――（男女が）一対一の、たがいの個性を重視し、情熱的な、明に暗に性的な欲望を背景にしてはいても、肉体的なものよりも精神的なつながりを重視し、永遠の忠誠を約束する関係――は、11〜12 世紀の西欧の吟遊詩人たちの発明物である「騎士道恋愛」（宮廷風恋愛）をその祖としている。この騎士道恋愛／宮廷風恋愛では、男性が女性の人精神性（品位）を崇めることが基本であり、また恋愛は結婚と対立するものと考えられている。むしろ恋愛は結婚の外でむすばれる（身体的には完全には成就されない）関係だった。「トリスタンとイゾルデ」伝説が典型でバリエーションが多い。
- 女性をあがめる騎士道恋愛を理想として、中世宮廷では恋愛が遊戯として楽しまれることになる。 瀬谷幸夫はカペラーヌスの『恋愛について』（恋愛術）(1186) に寄せた解説で次のように説明している (瀬谷, 1993)。

> 愛人たる若い騎士は自らの意中のより身分の高い既婚の貴婦人（多くは主君の奥方）を盲目的ではなく、理性と中庸をもって選び、彼女への「至純の愛」ゆえに礼節と奉仕と完全なる服従を誓い、愛の神キューピッドへの信仰を唯一の心の支えとする疑似宗教の形式をとる。……しかも、この恋には多くの障害が介在して、成就が困難なほど、いっそう価値があるとされる。

- この物語風の恋愛は、（特にフランスなどの）貴族階級での恋愛遊戯として展開された一方、演劇を通して民衆階級にも恋愛の理想として浸透していった。たとえばシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』(1595 前後)、『アントニーとクレパトラ』(1607 前後)。
- モンテーニュは『エセー』(1580) の男女の恋愛とセックスをあつかった「ウェルギリウスの詩句について」で、恋愛と結婚の違い、相性の悪さを論じている。

> 結婚という賢明な交わりにおいては、欲望はそれほど浮かれたものではなく、もっと地味で、鈍いものである。恋愛はわれわれが恋愛以外のものによって結ばれることをいやがる。そして、たとえば結婚のような別の名目の下に結ばれて維持される関係の中には、無気力にしか立ち入らない。結婚では、当然のことながら、親戚とか、財力とかが、本人の魅力や美貌と同じに、あるいはそれ以上に、重んじられる。何といっても、結婚は本人のためにするものではなく、それと同等に、あるいはそれ以上に、子孫や家族のためにするものである。結婚の習慣や利害関係は、われわれが死んだのちも長くわれわれの種族に影響する。だから私には、本人よりも第三者の手で、自分の判断によらずに他人の判断で結

ばれる結婚の方法が好ましい。……私の見るところでは、美貌や愛欲によって結ばれた結婚ほど早く紛争を起こして失敗するものはない。結婚にはもっと堅実で恒常な土台ともっと慎重な行動が要る。沸き立つような歓喜は何の役にも立たない。

……よい結婚というものがあるとすれば、それは恋愛の同伴と条件をこばみ、友愛の性質を真似ようとする。結婚は人生における甘美な結合であり、恒常と、信頼と、無数の有益で堅実な相互の奉仕と義務に満ちた結合である。

……結婚は有益と正義と名誉と恒常を本文とする。平坦ではあるが斉一な快楽である。恋愛はただ一つの快楽の上にもとづいている。しかもこの快楽は、実際に、いっそう甘美で強烈で鋭敏である。困難によって掻き立てられる快楽である。これには刺激と焼灼が要る。恋愛に矢と火がなくなれば、もはや恋愛ではない。ご婦人方が惜しみなく与える愛情は、結婚においては、過剰となり、愛情と欲望の鋒先を鈍らせる。

- モンテーニュは一方で、友情の高貴さは恋愛よりもはるかに価値のあるものだと主張する。

古代人の言う四種類の交際、すなわち、生まれつきによる交際、社会生活の交際、主客間の交際、性愛による交際は、単独でも、束になって力を合わせても、友情の境地に達することはできない。……女性にたいする恋愛をこれとくらべることは……不可能であるし、これと同じ範疇に入れることも不可能である。恋愛の火はたしかに、

> なぜなら恋の悩みに甘く苦い喜びをまぜる女神が私を知らないわけではないから

より活気があり、より熱く、より激しい。けれどもそれは向う見ずで、移り気で、動揺常なく、燃えるかと思うとすぐに消える熱病の火であり、われわれの一局所しか捉えない火である。ところが友情の熱は全身にゆきわたった、控え目な、むらのない熱さであり、一定した、落ちついた、きわめておだやかな、平坦な、少しも荒々しさや激しさのない熱である。それに、恋愛の熱は逃げるものを追いかける狂気じみた欲望にほかならない。……

要するに、われわれが普通、友人と呼び、友情と呼んでいるものは、何かの機会もしくは利益のために結ばれた知友関係や親交にすぎないものであって、われわれの心もただその点でつながっているにすぎない。ところが私の言う友情においては、二人の心は渾然と溶け合っていて、縫目もわからぬほどである。もしも人から、なぜ彼を愛したのかと問いつめられたら、「それは彼であったから、それは私であったから」と答える以外には、何とも言いようがないように思う。

- 市民階層での識字率が向上したためにこうした恋愛の理想は、通俗小説の形で一般化する（典型はルソーの『新エロイーズ』(1761)）。
- またいかにもロマン主義的な理想として、乙女の至純の愛に救済される苦悩する男性という

図式がある。ゲーテの『ファウスト』(1806, 1833)、キェルケゴールの同時代人であるワーグナー (1813 生）の『さまよえるオランダ人』[17](1843)、『タンホイザー』(1845) などがその代表だ。ちなみにトリスタン伝説を下敷にしたシェイクスピアの「ロミオとジュリエット」がコペンハーゲンで上演されたのは 1828。

- 一方、近代の（特にプロテスタントの）ブルジョワ商業者階級では、「妻」が家計（家庭と商業）を維持し、子供を養育・教育する必要があった。そのために、妻には一定程度以上の知性や教養が必要とされるようになった。夫婦の精神的・永続的結びつきが重視されることになった。夫婦は単に生活（労働）とセックスと生殖だけを目的とするユニットでない。結婚前の交際を通して、人生のパートナーであるにふさわしい相手を選ぶ必要がある (前野, 2006; Coontz, 2006)。これに対応して、賢明で貞節な女性が幸福な結婚を果たすという筋書の娯楽ロマンス小説が楽しまるようになる（リチャードソンの『パミラ』(1740))。
- その結果社会的に生じたのが、「恋愛結婚」という理想である。つまり、若い二人が、自由な（実は少なくとも親の承認というかたちである程度アレンジされた）出会いから、適切な期間の交際によってお互いをよく理解した上で、自発的に生涯の愛を誓いあい、その後は終生に渡る性的・非性的関係をもつ、という理想である。男女は単にアレンジされた出会いと交際を経て結婚にいたるだけではなく、互いに精神的にも肉体的にも愛しあっているといえる結婚関係を維持しなければならない。
- 一方で、キェルケゴールが生きた 19 世紀前半は、「自由恋愛」運動が胎動していた時期でもある。イギリスでは 18 世紀末に活躍した初期フェミニスト作家のメアリ・ウルストンクラフトが女性の人生とセクシュアリティを男性の支配から解放する上での結婚制度の害悪を説いた。また大陸ではサンシモン派がやはり女性の解放と（キリスト教や保守的な恋愛・結婚・セックス観にとらわれない）自由な恋愛を称揚した。こうした女性解放の思想と結婚制度の見直しとはキェルケゴールの著作活動の最初期から晩年まで意識されている[18]。
- こうした「恋愛結婚」という理想および「自由恋愛」思想と、保守的なキリスト教的結婚観のあいだには強い緊張・対立関係がある。キェルケゴールにとって問題だったのは、いかにして恋愛と結婚とセックス・生殖を調和させるか、ということだった。答えは、真にキリスト教的な結婚においてはそれが調和するはずだ、という理念である。

---

[17] 青年キェルケゴールが関心をもったアハスヴェル伝説のあからさまなパクリ。

[18] キェルケゴールの女性観については、2003 年のキェルケゴール協会大会で「「女性の偉大な能力についてのもう一つの弁明」と女性観」として簡単な紹介をおこなっている。